

日本における宗教と社会倫理の役割と実践
—戦後日本社会におけるエンゲイジド・ブディズムの特質—

基調講演：島 蘭 進

上智大学グリーンケア研究所客員所員・大正大学客員教授・東京大学名誉教授

パネリスト

大河内秀人（浄土宗僧侶、ソーシャル・ジャスティス基金企画委員）

小原克博（牧師、同志社大学神学部教授）

近藤俊太郎（本願寺史料研究所研究員）

岩田真美（龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター長）

司会・進行

高 満也（龍谷大学国際学部教授）

2022年9月30日（金）17:30～20:00

龍谷大学大宮キャンパス清和館3F大ホール

セミナーでは、近代日本における仏教の社会倫理の歴史を視野に入れながら、戦後の仏教の社会倫理について検討する。戦時期の国策への全面協力に対する反省と平和への貢献を高く掲げたはずの仏教界だが、その具体化はなかなか進まなかった。核実験反対運動や靖国神社国家護持への反対などでは一定の盛り上がりを見せたが、日常的な活動は葬祭仏教の枠内に止まる傾向が続いた。

そうしたなかで、仏教系の新宗教である創価学会や立正佼成会などでは菩薩行や「立正安国」といった理念を背景とした政治活動や社会活動が活発に行われた。立正佼成会が大きな役割を果たして形成された世界宗教者平和会議（WCRP、RfP）は、幅広い宗教協力の下で世界でも有数の宗教的平和運動へと成長していくが、その背後では、平和を目指す仏教的な社会倫理が大きな役割を果たしていた。創価学会も国連などを場とした平和活動に積極的に取り組み、立正佼成会とともに核兵器禁止条約の制定に貢献する団体となった。

だが、伝統仏教界を広く見渡すと、社会倫理的な意識はあまり高くなく、平和のための活動もさほど活発にはならず、貧困、格差、差別、環境問題などへの取り組みもあまり目立つものにはならなかった。ベトナム難民問題を端緒としたシャンティ（曹洞宗ボランティア会）や少し後の時期に発足するアユス（）などの社会活動は東南アジアなど海外に力点を置いたもので、国内での取り組みは目立たなかった。その背後には、福祉国家の理念のもと、国内の人々の福祉に関わることは政治に委ねるという意識も作用していたと思われる。

しかし、21世紀初頭の20年間で、仏教の新しい波が到来し、そこでは伝統仏教の僧侶がより活発に社会的に活動し、公共的な領域に貢献する例が増えてきている。例えば、終末期ケア、自殺防止、災害トラウマ、貧困緩和、脱原発や環境活動、さらには平和や社会正義に関する政治的問題などの分野においても、それ以前と比べると、活動や反省・考察が広がっているようである。これらの活動や考察の多くは、仏教徒が「疎外された社会」のあり方に対応するために、菩薩の慈悲にもとづく新しい社会倫理的实践を推進しようとするものを見なすことができる。また、人々が個々人の関心事を超えて、社会的な支援システムから外れてしまった人々に関心を持ち、支援し、寄り添うことを奨励している。

これらの活動は、普遍的な慈悲と非暴力に基づいた、現代日本のための新しい社会倫理を明示し実践しているものと見なせるだろうか。国際的な仏教界の社会参加仏教（エンゲイジド・ブディズム）の社会倫理ビジョンはそのように描かれている。だが、現代日本仏教における社会倫理のあり方は、必ずしも国際的に議論されている社会参加仏教のそれとは合致しないようである。本セミナーでは、現代日本仏教の社会倫理について、近代日本仏教の歴史を視野に入れつつ考察し、国際的な社会参加仏教（エンゲイジド・ブディズム）の像とも照らし合わせながら考察していきたい。

なお、このセミナーは、龍谷大学世界仏教文化研究センターと JNEB が継続的に行っている「エンゲイジド・ブディズム研究会」の一環で、IBEC の近刊『日本のエンゲイジド・ブディズム・歴史的な視点と現代的な実践例』に掲載されているテーマやアクティビティを取り上げるものでもある。

主催：龍谷大学世界仏教文化研究センター国際部門 エンゲイジドブッディズム研究会

共催：日本エンゲイジドブッディズムネットワーク (JNEB)